

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25760010

研究課題名(和文)近代博覧会における先住民族「人間展示」に関する歴史研究：その転用と変遷に着目して

研究課題名(英文) Display of Native People at Modern International Exhibitions: Their Spread and Transformation

研究代表者

宮下 敬志 (MIYASHITA, Takashi)

立命館大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：50509346

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代の欧州・米国・日本で行われた博覧会の歴史を研究対象とした。とくに、世界各国の先住民族が会場に見世物として連れてこられてなされた「動物園的な人間の展示」に注目した。

研究の結果、当初、観客を楽しませる目的で19世紀に始まったこのような展示が、1893年シカゴ万博以降になると、帝国主義的な支配を正当化するという政治的目的を帯びたこと、また同時に、展示を科学的に正当化するために、人類学が利用されていったことを明らかにした。

加えて、こうした状況が20世紀前半に、文化多元主義的な価値観に基づく展示に移り変わっていく経緯も明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study examines the history of international exhibitions held in modern Europe, the United States, and Japan, focusing on the “zoo-like spectacle” display of actual native people from around the world.

While these displays began in the nineteenth century for the enjoyment of visitors and for informative purposes, after the 1893 Chicago World Fair they came to have the political objective of justifying imperialist rule and became scientifically legitimized using anthropology. In addition, this study also clarifies how, during the first half of the twentieth century, the exhibitions came to be based on the values of cultural pluralism.

研究分野：史学

キーワード：アメリカ史 博覧会 先住民 人種主義 万博 文化史

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 博覧会についての歴史研究は、1984年のR・ライデルの著作を受け大きく進展した。そして、彼の直接・間接的影響から、フランス史ではP・モルトンの研究、日本史では松田京子の研究などが生まれた。これらの研究は、先住民を進歩の遅れた民族として展示したことの暴力性に注目して、博覧会という空間にみられる人種主義や帝国主義の問題に鋭く切り込んだ。

これらの研究は、研究史上大きな功績を残した。一方、次の3つの点で課題があったといえる。

第1に、帝国史研究として進んだため、分析が帝国主義時代の博覧会のみ限定されている。そのため博覧会「人間展示」の誕生から、20世紀後半に文化多元主義を象徴する新たな展示として再構成されるまでの長期的変遷を新しく分析する必要がある。

第2に、一国の博覧会のみ注目する傾向があり、世界史として横断的に分析をした研究が少ない。そのため、19世紀以降、各国政府関係者が先行する他国の博覧会を視察し、いかに「人間展示」を作り上げたのか、その転用過程を新しく調査する必要がある。

第3に、「博覧会における「人間展示」のうち「未開」状態の先住民を表した展示事例しか扱っていない。そのため、「文明化」した先住民の展示事例や、「未開」先住民と「文明化」先住民との対比的な展示事例などを新しく調査し、これまでの研究と結合し、網羅的に分析していく必要がある。

(2) 本研究の開始以前に、先住民教育に関する研究活動の一環として、1892年のシカゴ博覧会、1902年のセントルイス博覧会の調査を行う機会があった。

その際、米国政府が「文明化」のためにつくった先住民寄宿学校の教育成果を宣伝するために、博覧会内に擬似的な先住民寄宿学校を作って「文明化」しつつある学生を「展示」していたこと、学校が、伝統的な生活を先住民が再現した「屋外民族学展示」と意図的に隣接され、観覧者が先住民の「文明化」の以前と以後の状況を視覚的に比較できるように配慮されていたことを発見した。

このような点に注目し、博覧会に関する内外の歴史研究の状況を予備的に調査した結果、次の3点の研究史上の課題を設定することができた。これが本申請の着想につながった。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、先住民の・娯楽的な「人間展示」が始まる19世紀末から、・人類学的な「人間展示」と・政策宣伝的な「人間展示」が始まる世紀転換期を経て、現代の・文化多元主義的な価値観に基づく展示に至る博覧会の展示変遷を、グローバル・ヒストリーとしてまとめることである。

(2) 本研究目的の学術的な特色については、以下の3つにまとめられる。

・世界史・グローバル・ヒストリーとしての博覧会史の分析

博覧会における「人間展示」の研究は、これまで各国の帝国主義・植民地支配の問題点を明らかにすることに主眼を置いてきた。そのため、分析は一国史の枠組みに限定され、国家間の相互関係や政策転用に無関心だった。また分析される時代もほぼ帝国主義時代に限られていた。

一方、本研究は、「人間展示」手法の地域を越えた転用過程について、19世紀末から現代までの博覧会までを射程に入れて分析することを計画している。その点で、本研究は、博覧会史研究をグローバル・ヒストリー研究の枠組みで新しく分析できる。

・博覧会研究と各国マイノリティ政策史との結合

博覧会における「人間展示」の研究は、これまで次の2つを主に研究内容としてきた。

第1に、営利目的から、民間業者が設置した博覧会の娯楽区画における、「未開の」先住民の「人間展示」の分析をもとにして、表象の暴力性を指摘する研究である。

第2に、学術目的から、研究者らが監修した博覧会の人類学展示における、「未開の」先住民の「人間展示」の分析をもとにして、人類学への人種差別主義の存在を指摘する研究である。

一方、本研究は、これらだけではなく、次の3点目の分析も意図している。つまり、本研究では、

第3に、政策宣伝の為、各国政府が主導した博覧会の公式区画における、「未開の」先住民が「文明化」していく様子を表した、比較「人間展示」に関する政策史的な分析を試みる。

本研究は、先住民政策を研究対象とするため行政文書を研究に利用できる。そのため、

従来の文化表象・言説研究としてだけでなく、マイノリティ政策史として博覧会を新しく分析できる。

・国民や「人間展示」された民族側の声への注目

博覧会における「人間展示」の研究は、これまで主催者が編纂した資料から議論をしてきた。そのため、観覧した国民や、「展示」された先住民の声を十分拾い上げられていないという問題がある。

一方、本研究は、第1に、申請者が専門とする同時代の新聞・雑誌資料の言説分析を通して、観覧した国民の声を集める。

第2に、スコットのHidden Transcriptの分析法を主に使いながら、オーラルヒストリー資料や民族新聞から博覧会で「展示」された先住民の声についても拾い上げていく。そうすることで、博覧会が实际的に社会に与えた作用を新しく分析できる。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究は、広範囲の地域・時代の博覧会を扱うことで総合的な博覧会研究を目指す。

限られた時間で成果を出すため、本研究は、博覧会の「人間展示」について、次の5つに焦点を絞って歴史資料を調査する。

・各国政府が展示に至る背景：先行する博覧会の影響や視察による展示手法の転用過程の分析

・各国政府の展示目的：一般国民への政府政策の宣伝や、国民教化の分析

・展示手法・展示空間：人間や事物の展示手法、会場の地理的・空間的な配置の分析

・国民が受けた影響：展示をみた国民の人種階級の認識と優生学的見解の浸透の分析

・先住者が受けた影響：「展示」された先住民や展示を見た先住民の受けた影響の分析

(2) こうした目的を達成するための方法論として、本研究は、資料から帰納的に考察する歴史学的手法を用いる。

しかし、従来の文字資料や聞き取り資料だけでなく、写真資料や図面資料を使った分析も行う。

このうち、写真資料については近年の文化研究で使われる分析法を利用してコンテ

クストを読み解き、図面資料については空間研究の成果をふまえて、会場図や建築図面から展示配置から読み取れる「意図」を分析する。

### 4. 研究成果

(1) 本研究は、近代世界の博覧会の分析に際して、米国・欧州・日本を主たる分析対象とした。以下、それぞれの地域ごとに、調査した内容についてまとめる。

(2) 欧州（ヨーロッパ）

19世紀後半、最も早く博覧会における「人間展示」が現れたのがこの地域である。歴史的に正確なその「はじまり」を明らかにすることはできないが、ある程度大規模に展示が始まったという点では、1889年のパリ万国博覧会がその起源といえる。

この博覧会では、セネガル（フランス領西アフリカ）や、ニューカレドニアから400人を越す現地人が連れてこられて、実物展示がなされている。

こうした「人間展示」の着想は、パリの訓化動物園で行われていた、人間を「動物園的」に展示する興行が源泉の1つと見込まれる。ただ、欧米においては、「有色人種」や先住民を展示する興行は、17世紀以降の貴族らによる「見世物」としての展示を皮切りに、サーカスなどの興行などでも先行的にみられる。したがって、パリ博の「人間展示」は、こうした展示から発展したものとも言えるだろう。

パリ博の場合、特に、400人規模で、アフリカの「未開の村」の再現がなされた「コンゴ村」をはじめとする、大規模な展示は、娯楽的な「見世物」要素がきわめて強かったといえる。

ただ、政府関係者や人類学者の関わりも、一定程度見いだせる。例えば、人類学者らは、博覧会や会期中のパリ市内の博物館などにおける、世界の先住民族（アメリカ・アフリカ・アジアの人々）や、過去の人類についての室内・野外展示に関わっていた。また、ここでは、蝸人形のほか、アジア・アフリカ・アメリカ各地の生身の人間の「展示」もなされ、手工芸も行われた。さらに言えば、会期中には、人類学者らによる「展示の観察・調査」も行われていた。

その後、欧州における展示の学術性・政治性は、20世紀以後、イギリスやフランスにおいてなされる国内博覧会（例えば、1900年のパリ博）においては、さらに色濃く、またシステマティックになっていく。なお、こうし

た 20 世紀以後の状況については、P・モルトンや、英国については、川本真浩らの研究成果があるため、今回は深く掘り下げなかった。

### (3) 米国

米国の場合、国内の先住民であったインディアンなどの展示は、1876 年のフィラデルフィア万博などに先駆的に見られる。しかし、規模の上で、1889 年のパリ博に匹敵する規模で「生身の人間展示」がなされたのは、1893 年のシカゴ・コロンプス博覧会が初めてだった。

この博覧会では、パリ万博の事例に比べて、政府と学知（人類学や教育学）が「人間展示」により直接的に関わっていた。

この両者が関わった展示は、以下の 2 種類に分類できる。

第 1 に、連邦政府の民族学局の支援を受けつつ、人類学者の F・プットナム（後のアメリカ人類学会会長）が構成した人類学展示である。この展示では、ナバホ族などの先住民を雇用し、工芸品を作らせるなどの「人間展示」を行っている。展示は、当時の社会進化論的な人類発展段階論に基づき、「石器時代の人類の状況」を学術的に表すことを目的としており、過去の博覧会に較べても、一層「科学的」だった。

第 2 に、アメリカインディアン局が行った、教育学者（教育者）によるインディアン展示である。こちらは、博覧会内にインディアン寄宿学校を作り、各地から連れてこられたインディアンの子供たちの授業風景を「展示」する内容だった。当時の政府は、大規模な国費を投じて「インディアン文明化政策」を押し進め、先住民を「文明化」させることに熱心だったため、その宣伝活動の一環としてこの展示が行われていた。

この両者の展示は、対比的であった。プットナムによる人類学展示では、「石器時代の人類を表すため」、「過去」の生活や宗教行事・工芸品を紹介するために「人間展示」が行われた。それに対して、インディアン局の展示は、「文明化」した現代の先住民を表すため、英語の授業や、（白人風の）手作業教育の授業を受ける「現在の」先住民の「人間展示」を行っていた。

一方、運営者側もこの対比性をよく理解しており、それぞれの展示を、人類の発展段階を示すものとして、隣り合わせで展示することを計画し、実行している。

1893 年のシカゴ博以後も、米国では、1895 年のアトランタ博、1901 年のバッファロー博

において、インディアンの「人間展示」がなされた。そして、1904 年のセントルイス博では、インディアンだけでなく、米国やその他の国の植民地から住民を厚め、総計 3000 人前後からなる、「人間展示」を行うことを計画した。

セントルイス博の場合、展示構成は、政府関係者と人類学者がより強固に結びついた。展示は、歴史主義（発展段階論）と伝播主義（地理的關係性）に基づいて、異人種を階層的に展示する大規模な構成とされた。より大規模なインディアン寄宿学校が会場内に作られたほか、米国が支配しはじめたフィリピンについて、1000 人を越す住民を「展示」し、「文明による野蛮の支配の正当性」を内外に示された。

こうして、米国の博覧会では、多額の予算を投入し、政府と学知（人類学や教育学）が分かちがたく結びついた「人間展示」が成立するに至った。両博覧会にみられた対比性については、観客も十分認識しており、新聞の投稿欄などから、それについて、一定の「教育効果」があったことが読み取れる。

なお、こうした展示の着想について、先行するフランスやイギリスなどから直接的な影響を示唆する資料はない。そのことから判断すると、「文明化」した先住民と、「過去の先住民」を対比させる手法は、米国の人類学（民族学）にみられる展示手法や、当時のインディアン寄宿学校でなされた諸行事の際に見られた展示手法を転用したと解釈すべきであろう。

一方、20 世紀半ばになると、米国では、政府関係者や学者らが、博覧会における「人間展示」に積極的に関わる事例は減少した。例えば、1915 年のサンフランシスコ博では、先住民の「人間展示」を行う「インディアン村」こそ作られたものの、これはサンタフェ鉄道の「企業館」として運営された娯楽目的の強い展示だった。また、1933 年の第 2 回シカゴ博では、シカゴ大学の人類学者の指導で同様に「インディアン村」が作られたが、規模が小さく、他の展示に比べてそれほど目立つものではなかった。

この時代の展示は、以前に較べて、インディアン諸部族の文化を「芸術」として評価する色彩が強く、「インディアン芸術館」が会場に立てられるなど、文化相対主義的な展示が中心となっている。博覧会という場においては、現実の政治状況よりも早く、こうした変化が見られると言えるかもしれない。

### (4) 日本

研究史上あきらかなように、明治時代以降、

同国において開催された博覧会においても、アイヌ民族や「台湾原住民」などの「人間展示」がしばしば見られた。

こうした展示は、多くの場合、江戸末期以降の日本の万博参加において、欧州や米国で公式・非公式に見聞した展示手法を転用することで成立した。

例えば、米国については、田中不二麿のフィラデルフィア万博の視察報告が残されているほか、1900年のパリ万博、1904年のセントルイス博、1905年のリエージュ博などの日本の公式報告書では、各博覧会の「人間展示」について、たびたび言及されている。

一方、こうした、列強各国の「トレンド」をふまえて、日本が海外に支配民族の「人間展示」を「輸出」した事例もみられる。例えば1910年の日英博覧会における「アイヌ村」「台湾土人村」などに見られる。欧米で開催された過去の博覧会では、「エキゾチックな」日本文化を「人間展示」する側だった日本が、帝国主義時代にはいり、諸外国で「人間を展示する側」に回ったのが、この時代だった。

なお、国内では、人類館事件で知られる1903年の内国勸業博覧会をはじめとして、その「支配する諸民族」についての「人間展示」がみられた。また、それ以後も、1913年の明治記念殖産博覧会、1926年の国産新興博覧会などで同様の展示がみられる。

日本において、こうした展示が文化多元主義的な「人間展示」に変容した時期は、現状では正確に特定できない。しかし、少なくとも、1958年の北海道大博覧会においては、演芸興行の一環としてアイヌの人々の参加が見られる点は、変化後の状況を表すものと指摘できるだろう。

#### (5)研究成果をふまえた新しい課題

以上のように、本研究は、先住民族を中心とする「生身の人間」の展示を分析し、主に19世紀後半から20世紀前半期の博覧会について分析をなした。

今回、研究を進める中で、特に、人類学者が関わる展示について、博覧会においては、「人間展示」よりも、蠟人形やジオラマなどを使った、先住民族の「静的展示」が数の上では圧倒的に多いことが分かった。

また、博覧会における大規模な「人間展示」がセントルイス博を境に衰退した理由を、今回の分析では、政治思想や学知自体の変化にみた。しかし、歴史資料をみていくと、コーディネーターへの謝金や、先住民の旅費など莫大な予算がかかる「人間展示」を行えない

という予算的制約の面も大きかったことが分かった。

そういった場合、彼らは「代替案」として、とくに小規模な博覧会では、予算が比較的かられない人形やジオラマを使った「静的展示」を利用した。この点をふまえ、今後は、静的な展示も考慮に入れながら、博覧会展示にみられる人類学を中心とした学知の変遷を、より詳しく分析したいと考えている。

#### 引用文献

Rydell, Robert. *All the World's a Fair: Visions of Empire at American International Expositions, 1876-1916*. Chicago: Univ. of Chicago Press, 1984.

Morton, Patricia A. *Hybrid Modernities: Architecture and Representation at the 1931 Colonial Exposition, Paris*. Cambridge, Mass.: MIT Press, 2000.

松田京子『帝国の視線：博覧会と異文化表象』吉川弘文館、2003年。

#### 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計2件)

宮下 敬志「近代博覧会における「未開の先住民」の「人間展示」：展示に見られる学知を中心に」立命館史学会大会(2015年12月13日)開催場所：立命館大学衣笠キャンパス(京都府京都市)

宮下 敬志「非自発的な先住民の移動：19世紀後半期のアメリカ先住民の強制移住政策とその正当化の論理」日本アメリカ史学会大会(2013年9月21日)開催場所：立命館大学衣笠キャンパス(京都府京都市)

〔図書〕(計1件)

宮下 敬志 他、ミネルヴァ書房、教養のための現代史入門、2015年、418(43-60, 113-130)

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

宮下 敬志 (Miyashita, Takashi)  
立命館大学・文学部・非常勤講師  
研究者番号：50509346